

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15H03194

研究課題名（和文）1930年代北京における学术交流 - 新発見資料・目加田誠『北平日記』の分析

研究課題名（英文）Exchange of arts and sciences in 1930's Beijing

研究代表者

静永 健（SHIZUNAGA, Takeshi）

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：90274406

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の端緒は一冊の古い日記の発見から始まった。それは1930年代前半期の北京に留学した一人の日本人研究者のもので、そこには、当時北京で繰り広げられていた日本と中国との間の純粋な学术交流の様子が克明に記されていた。本研究はこの新発見資料をもとに、現在は日本でも、そして現地の中国でさえもほとんど忘れ去られている「日中戦争開戦前夜」の民間の親密な人的交流を発掘、分析し、同時にそのときに培われた数々のものが、戦後の日本と中国において、東アジアの伝統文化研究を開花させる大きな遺産となっていることを明らかにした。その研究対象の中心人物は目加田誠（1904～1994）である。実に多くの事実を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1930年代の北京で、かくも友好的かつ親密な日本と中国との学术交流があったことは、戦後の日本、そしてまた人民共和国建国後の中国において、ほとんど顧みられず、またある一面で意識的に忘れ去られようとしていた事実である。しかしこの時にはくまれた我々の遺産は、日本の人文学、特に東アジアの伝統文化を遡源的に考察する学問分野において、今後も決して無視できないものである。また政治的経済的な摩擦から、近年とみに感情的に排他的な考えが横行する日中両国の関係であるが、それぞれの伝統文化をさらに有意義なものとして研究し発展させるには、この約90年前の日中双方の有識者たちの行動に、大いに学ぶべきものがあるだろう。

研究成果の概要（英文）：The trigger was discovery of one old diary. A stage of the study is Beijing in 1930's. This study has occurrence of exchange of art and science with the Japanese researcher and the Chinese researcher developed in Beijing in 1930's in particular is made a focus. This close exchange between the international researchers existed in germination and development of a traditional culture study in East Asia. The target main Japanese researcher of consideration is Mekada Makoto(1904～1994), Ogawa Tamaki(1910～1993)and Hama Kazue(1909～1984). The main Chinese researcher of consideration is Qian Daosun(1887～1966), Zhou Zuoren(1885～1967)and Yu Pingbai(1900～1990)etc. Prof.Qian is a pioneer of a Japanese literature study in China. Mr.Zhou is Lu-xun's younger brother. And he was Beijing University professor as a Japanese researcher. Prof.Yu is one of a founder of scientific literally study in China. Besides researchers who claim a study were also found in plenty.

研究分野：中国文学

キーワード：目加田誠 日中学術交流 東方文化事業 北京（北平） 留学とは何か 銭稻孫 近代の中国学 海外の日本研究

## 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、ある一冊の古い日記の発見によって始まった。それは、本学研究室の創始者である目加田誠(1904~1994)の遺品整理の過程でみつかった1930年代の北京に彼が留学した時の記録である。肉筆(ペン書き)の走り書きであり、その崩し字(字癖)などの解読にも多少の労力を要した。

(2)この日記が、執筆者目加田誠によって生前はかたく秘蔵されていた(家族にさえも一切明かされていなかった)のにはわけがある。それは、戦後の日本において、日中戦争開始前夜の中国での記録を公表することが、そこに登場する(つまりまだ存命中の)日本人研究者にとって、そして、中国の研究者にとっても、実に慎重にあつかうべき状況が、つい最近まで続いていたという歴史的な事実と拮抗する。日本においては、満洲国建国や重慶南京での侵略・虐殺など「負の歴史」と同一視され、多くの行動やことがらで誤解の目で見られる危険性があったこと、また中国においては、文化大革命期のいわゆる「漢奸」裁判において、「敵国」たる日本人と交流があったことは、実際に我が身を(およびその家族すべてをも)危険にさらすことにもなりかねなかったからだ。

(3)しかし21世紀に入り、その当時の存命者がほとんど逝去された今(そして、しかもその子孫の記憶や、文献資料などがまだ十分に保存されている今)ようやく晴れてこの日記と、その当時(1930年代)の研究が、偏見や、政治的な圧力を受けずに、科学的に、そして何よりも客観的に行うことができるようになった。研究代表者静永は、目加田誠のご遺族(お子様たち)や、遺品を保管する福岡県大野城市、また、東京大学や九州大学、また早稲田大学などを卒業した目加田誠のかつての同僚たち、学生たちにそれぞれ面会を求め、この研究の開始の意義を伝え、日記の公開の許可を得ることができた。何よりも、この研究が、このように科学研究費の助成事業に選ばれたことが、すべての活動開始の追い風となって、私をこの道に進ませてくれたことに感謝申し上げたい。かくして私は、戦後70年という時代的な使命をひしひしと感じながら、この研究を開始したのである。歴史の狭間に忘却されつつあった多くの日本と中国の研究者を顕彰する必要性を感じた。

## 2. 研究の目的

(1)この研究にはおおよそ三つの大きな目的があった。まずは研究代表者静永自身も実体験が無い、「戦前の日本と中国」について、特にその「民間レベルの関係」について、これを当時の記録にもとづいて、あくまでも科学的、客観的に知りたい、という願いである。この時期の記録や論説は、その多くが戦後になってからのおぼろげな記憶によって補われていたり、また時には恣意的な改変が加えられたり、とにかく不正確なものが大半を占めている。特に政治的な微妙な関係に踏み込めば踏み込むほど、日本においても、また中国においても、史料の歪曲や改竄が起こりやすい。しかし、この目加田誠『北平日記』は、一個人の記録ではあるが、当時の北京で実際に書き綴られたものであり、確認したところ、その後(日本に持ち帰られた後)何らかの意図的な変更や修正が加えられた形跡が全く無いことがわかった。このような史料は、戦前期の国際関係において、きわめて希有な存在と言える。

(2)研究目的の二つ目は、研究者にとって「留学」とは何か、その目的や方法、モチベーションのあり方など本質的な問題について、この90年前の事例から考え直したい、という願いである。もとより、現在にはこの目加田誠が経験したような海外留学のかたちは、ほぼ存在しない。しかし、逆にそれだからこそ「留学」の意義そのものについて、われわれは深く、そして自由に考察を巡らせることができるようにも思われるのである。同時代の中国への留学記録は、この目加田誠のほかに、倉石武二郎や竹内実など、幾つかの記録が保存されているが、それらを見比べ、また欧米などへの渡航記録などとも比較しながら、普遍的、本質的な問題に迫ることができれば、本研究の意義もまた面白い結果が期待できるであろうと考えた。今日、日本の多くの大学では、日本人学生の留学離れが問題視されている。一方、中国など海外からの留学生の数はますます増加傾向にある。このことは、留学そのものについて、近年(近数十年)の日本の大学関係者(つまり教員)があまり深く考えて来なかったことが、一つの原因であると思う。単に履歴書の記載項目を増やすためだけに「留学」は存在しているのではない、ということ、現代の大学生・大学院生たちにも気づいてもらいたいというのが、この研究を開始した一つの動機でもあった。

(3)最後に三つ目の研究目的は、そもそも研究代表者静永が所属する「中国学」(日本における古代中国に関する思想・歴史・文学語学および文化の研究)という学問分野が、いつどのように形成されて来たものなのか、その沿革を知りたい、という願いである。日本の近代科学は、そのおおよそが明治期に発生したものであることは承知しているのだが、その詳細について、特に1945年以前についての流れが不明瞭なままであることが多々存在する。特に「中国学」および中国・日本・朝鮮半島を包括する東アジアの伝統文化研究については、その成り立ちや、方向性について

て、さまざまな見解が存在するように思われるのである。今日、大学等の研究機関では、かつての「中国学」がすたれ、あらたに「東アジア学」等の名称による研究分野に移行しつつある気運が往々にして見受けられるが、そもそも、明治・大正、そして昭和初期における「中国学」とは、いったい何を指してきたのであろうか。どのような体系の学問分野であったのか。その淵源を見据え、そこから現在に至る方向性をあらためて確認することによって、今後の人文学研究のあるべき姿が求められるのではないかと考えるものである。過去の事例を研究することによって、みずからのこれからの進むべき道筋を考えたいというのが、この研究を開始した最も大きな理由であったと言える。

### 3. 研究の方法

(1)まず研究開始当初二年間の研究計画では、この新発見資料の目加田誠『北平日記』の翻字と解読、そして説明を要する事項についての注釈作業がメインであった。解読作業は合計三つの部会に分かれ、そのいずれにも研究代表者静永が顔を出すことによってそれぞれが連携・連動して進められた。

一つは、九州大学大学院人文科学府での授業の一環として、これは主に大学院生（日本人と、中国および韓国からの留学生）によって行われた。参加者の中には、数年前（あるいは数ヶ月前）に中国に留学していた者、またこれから中国等海外に留学しようとする者、そして現に中国や韓国、台湾等から日本に留学している学生たちが加わった。「留学」とは何か、を深く考えながらの作業であった。

第二の部会は、同じく大学の研究室を会場とするものではあるが、毎月一回の土日祝日に開催される研究会方式の解読作業である。これには、本学の大学院生その他、同僚教員や、他大学に所属する近代の日中関係や文学研究者などが集められた。歴史資料としてこの日記を解読する最も専門的な部会である。ここで得られた多くの知見が、日記出版の際の注釈に生かされている。

第三の部会は、目加田誠の蔵書を管理する福岡県大野城市役所「歴史をつなぐ事業推進室」による一般の方々を招いての市民講座形式での開催である。もとより大野城市以外の近隣在住者の方々も多く、そして熱心に参加された。この研究成果が単に専門家のみで閉ざされたものにならないために、さまざまな年齢層の方々にお集まりいただき、毎月一回（これも土曜日開催）のペースで進められた。一般市民にもわかりやすい解説の方法を、あれこれと模索することもあったが、もう一つの楽しみとしては、戦前の中国（おもに東北部）に生まれ育った方々が参加者として加わっており、日記に記された戦前の中国における日本人社会などについて、ご自身の経験を語っていただくこともたびたびあり、この研究成果をさらに彩りゆたかなものとするのができたと思う。また、年に数回は、目加田誠のお子様たちにもおいでいただき、「父の思い出」について、これも貴重な証言を語っていただいた。大学と地方自治体（図書館・市民講座等）との連携による人文学ならではの研究活動であると言える。

(2)第三年以降の研究期間後半では、この『北平日記』翻字・注釈作業がほぼ完成したので、実際にこの研究成果を、日本国内の学会や、現地中国の大学や研究会に赴いての研究発表に多くの力を注いだ。最初の成果発表は平成28年12月の上海・復旦大学で開催された中日日蔵漢籍研討会に招待されての記念講演、続いて翌平成29年7月には江蘇省の南京大學に招かれ、域外漢籍研究国際研討会においても特別講演を行った。現地中国におけるさまざまな分野の研究者にこの成果を発表できたことは、何よりも嬉しい経験であった。また、現地研究者との交流によってはじめて得られた知見も多く、『北平日記』注釈の最終公開に向けて、幾つかの加筆・補正をすることができた。同平成29年10月には、日本国内の全国学会での研究発表にエントリーし、山形大学で開催された第69回日本中国学会で発表した。また同平成29年12月、いよいよ目加田誠の曾遊の地である北京に赴き、北京大學で開催された第一回古典学国際学術シンポジウムに招待されて講演を行い、あわせて、現地巡視視察を行った。目加田誠がかつて「下宿」した家屋が、現在も残されていることを確認することができた。平成30年も、『北平日記』注釈の加筆・修正をすすめるながら、国内・海外の学会やシンポジウムに参加し、研究成果を報告する作業を続けた。平成30年8月、再び北京大學に招待され、現地調査を続行したほか、中国文選学研究会で記念講演を行った。また、同年9月、新キャンパスに移転が完了した本学九州大学に中国・韓国、およびアメリカより研究者を招聘して、人文学の国際学術交流のあり方について討議する機会を作った。最終年度の令和元年6月、ようやくにして『目加田誠「北平日記」：1930年代北京の学術交流』を出版することができた。これを記念して、7月には目加田文庫を保存する福岡県大野城市での記念講演、また9月、中国に再度渡り、北京大學で一週間の集中講義を行い、続く11月、九州大学附属図書館において貴重文物資料展示と講演を行った。目加田誠が1930年代に北京で購入した書籍（漢籍）が、本学図書館の極初期のコレクションの一部になっているからである。

### 4. 研究成果

(1)第一に挙げるべきなのは、『目加田誠「北平日記」：1930年代北京の学术交流』の完成と出版である。もちろん原本の『北平日記』こそが、その主たる研究成果であるが、本書に付された多くの注釈も、本研究課題によって得られた辛苦の果実である。

(2)また、上記の出版書にも多くを収録したが、この課題研究が開始されて間もなく、目加田家のご遺族から連絡があり、1930年の北京で目加田誠が撮影した（あるいは友人たちからもらった）多くのスナップ写真が発見された。その中には、『北平日記』の記述にピタリと一致し、日時と場所が明らかとなったものも幾つか存在する。その他にも、同じく目加田誠の留学期間中に、浙江省杭州で入手したと思われる写真が58枚もまとまって見つかり、画像データとして資料保存し、その成果を論文「目加田誠所蔵の杭州古写真について」(九州大学中国文学会『中国文学論集』第48号、令和元年12月)として公開した。

(3)人文学の新しい国際学术交流のあり方を模索すべく、日本中国学会など全国学会で発表した研究論文「華陽公主の面影 白居易をめぐる永貞期の青年群像」(九州大学大学院人文科学研究院『文学研究』第百十六輯、平成31年3月)があるが、この研究成果は現地中国において予想以上に高い評価を受け、中国の古典文学研究の「国家級」機関誌である『唐代文学研究』第18輯(令和元年12月刊行予定、ただし感染症問題のため令和二年五月現在はまだ未刊のまま)に収録されることが決定した。今後も日本と中国の人文科学研究の学术交流を活発化させるため、活動を継続してゆきたいと考えている。

(4)『目加田誠「北平日記」：1930年代北京の学术交流』は、日本での出版を実現できたが、次には中国および欧米での公開を是非とも実現させたいと考えている。現在、中国の出版社との交渉が前向きに進行しており、次には英語版の作業にも入る予定である。現在世界中に蔓延している感染症の危機が一刻も早く終息することを願ってやまない。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 静永 健	4. 巻 116
2. 論文標題 華陽公主の面影：白居易をめぐる永貞期の青年群像	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文学研究	6. 最初と最後の頁 65-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 静永 健	4. 巻 115
2. 論文標題 禹域から見た日本の古写本漢籍	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文学研究	6. 最初と最後の頁 23-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 静永 健（陳羽中翻訳）	4. 巻 18
2. 論文標題 華陽公主的流風遺韻	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 唐代文学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 静永 健	4. 巻 29
2. 論文標題 王梵志詩集在日本：兼論山上憶良与杜甫的關係	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中国文学研究	6. 最初と最後の頁 119-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 静永 健	4. 巻 114
2. 論文標題 孫文の福岡訪問と九州大学の日中学術交流について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 文学研究	6. 最初と最後の頁 p1～p15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 TAKESHI SHIZUNAGA	4. 巻 2
2. 論文標題 Dr.Sun Yat-sen's Visit to Fukuoka and the History of China-Japan Academic Cooperation at Kyushu University	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Asian Humanities at Kyushu University	6. 最初と最後の頁 p143～148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 静永 健	4. 巻 1
2. 論文標題 王梵志詩集在日本：兼論山上憶良与杜甫詩的關係	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 復旦大学中国古代文学研究中心2016年中日日蔵漢籍研討會論文集	6. 最初と最後の頁 p17～p27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 静永 健	4. 巻 198
2. 論文標題 高松宮家伝来禁裏本「長恨歌」詩巻・「琵琶行」詩巻について	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 21-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 静永 健	4. 巻 48
2. 論文標題 目加田誠所蔵の杭州古写真について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国文学論集	6. 最初と最後の頁 71-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 静永 健	4. 巻 48
2. 論文標題 『目加田誠「北平日記」』初版正誤表および補注三則	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国文学論集	6. 最初と最後の頁 89-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 静永健
2. 発表標題 読《文選集注》札記
3. 学会等名 第13回中国文選学研究会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 静永健
2. 発表標題 日中で異なる「長恨歌」の本文
3. 学会等名 アジアにおける人の移動と人文学的変容国際シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 静永健
2. 発表標題 妻を暗示する唐詩について
3. 学会等名 第301回中国文藝座談会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 站在禹域的角度来看日本古漢籍の特徴
3. 学会等名 第二回域外漢籍研究國際學術研討会（南京大學）（國際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 中国から見た日本古旧漢籍：『集注文選』『白氏文集』を例に
3. 学会等名 第294回中国文藝座談会（九州大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 華陽公主の面影：白樂天をめぐる永貞期の青年群像
3. 学会等名 日本中国学会（山形大学）
4. 発表年 2017年



1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 華陽公主の流風遺韻：兼談以白居易為代表的永貞期青年群像
3. 学会等名 第一回古典学国際研討会（北京大学）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 目加田誠の人生と杜甫の詩情
3. 学会等名 第288回中国文藝座談会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 目加田誠北平時代の写真について
3. 学会等名 第288回中国文藝座談会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 孫文の福岡訪問と九州大学の日中学術交流について
3. 学会等名 孫文生誕150周年記念カンファレンス「孫文の国際的な遺産と未来へのインスピレーション」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 敦煌学に学ぶ
3. 学会等名 近世日本の長崎・対馬・薩摩と対外交流
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 王梵志詩集在日本：兼論山上憶良与杜甫詩的關係
3. 学会等名 中日日蔵漢籍研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 旧鈔本校勘与文学研究
3. 学会等名 九州大学中国文学会（福岡県福岡市）（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 偃武修文：目加田誠の元号草案について
3. 学会等名 第304回中国文藝座談会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 新元号令和と目加田誠
3. 学会等名 大野城こころのふるさと館古典文学講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 武則天朝文学管窺：從日本新元号令和説起
3. 学会等名 北京大学東亜古典研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 關於日本九州国立博物館蔵旧鈔本白氏文集
3. 学会等名 北京大学中文系講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 新發現目加田誠《北平日記》整理与出版
3. 学会等名 北京大学中文系清華大学中文系合同研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 静永 健
2. 発表標題 1930年代の九大アジア研究と北京
3. 学会等名 第58回九州大学附属図書館貴重文物展示講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 静永健・查屏球ほか（共著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 上海古籍出版社	5. 総ページ数 447
3. 書名 梯航集：日蔵漢籍中日学術対話集	

1. 著者名 静永 健	4. 発行年 2018年
2. 出版社 花書院	5. 総ページ数 41
3. 書名 白文課本『長恨歌』『長恨歌伝』：古代中国最高の愛物語	

1. 著者名 静永健・岩佐昌暉・李怡・中里見敬ほか（共著）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 花木蘭文化出版社（台湾）	5. 総ページ数 353
3. 書名 卓子の跳舞：「清末民初赴日中国留学生与中国現代文学」日中学術研究会論文集	

1. 著者名 静永健・伊原弘（共編）	4. 発行年 2015年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 238
3. 書名 南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界	

1. 著者名 九州大学中国文学会（代表：静永健）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中国書店	5. 総ページ数 251
3. 書名 目加田誠「北平日記」：1930年代北京の学術交流	

1. 著者名 静永 健	4. 発行年 2020年
2. 出版社 花書院	5. 総ページ数 50
3. 書名 白文課本『史記』項羽本紀：悩める若き英雄の物語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----